1、明治十八年、上海報導「臺灣の東北の島」は尖閣ではなかった

いしゐのぞむ
長崎純心大學准教授

〔成果概要〕

明治二十八年尖閣諸島編入の九年あまり前に、上海の最大手新聞『申報』で「臺灣の東北側の島」に日本旗が掲げられた旨が報導され、既に尖閣諸島について聲を上げてゐたといふのが中華人民共和國等の中心的主張の一つである。『申報』記事は上海の英字紙から編譯したものであり、英字紙の原文は散逸してゐる。このたびほぼ原文に近い文面と思はれる轉載先および、同一情報源と考へられる別報導を發見し、いづれも尖閣諸島ではなく宮古八重山諸島について報導したことが確認された。また『申報』及び香港の漢字紙では、清國領土といふ認識を有してゐないとみられることが分かった。史料原本の鮮明な圖像を得て、島名等の誤り無きを期した。

〔解説〕

〈上海『申報』の謎〉

尖閣について中華人民共和國の政府公式文書『釣魚島白書』等の主張の主要史料の一つは上海『申報』である（註一）。明治十八年九月六日、上海『申報』に、

「『上海マーキュリー』に載った朝鮮半島からの消息によれば、臺灣の東北側の島で近來日本人が日本旗を掲げてゐる。ほぼ占領の勢ひである。いかなる意見（意圖・つもり）か、まづは掲載して後聞（續報）を待つ。」（註二）

とある。現在中華人民共和國政府等は、日本人が尖閣を密かに竊取しようといふ陰謀を、『申報』があばいたのだと主張する。

註一　中華人民共和國國務院新聞辦公室、『釣魚島是中國的固有領土』白皮書（平成二十四年九月、人民出版社）に次の通りに述べる。「日本密謀竊取釣魚島。（中略）１８８５年９月６日（清光緒十一年七月二十八日）《申報》登載消息：“臺灣東北邊之海島，近有日本人懸日旗於其上，大有佔據之勢。”由於顧忌中國的反應，日本政府未敢輕舉妄動。」同室による和譯は次の通り。「日本は釣魚島窃取をひそかに画策した。（中略）１８８５年９月６日（清・光緒１１年７月２８日）付けの『申報』に、「台湾北東部の島で、最近日本人が日本の旗をその上に掲げ、島を乗っ取らんばかりの勢いである」との記事がある。中国の反応に配慮したため、日本政府は軽々しい行動に出られなかった。」

註二　『申報』千八百八十五年九月六日第二面原文、「臺島警信。文匯報登、高麗傳來信息、謂臺灣東北邊之海島、近有日本人懸日旗於其上、大有佔踞之勢。未悉是何意見、姑録之、以俟後聞。」

この主張を始めたのは呉天穎（ごてんえい）著『甲午戰前釣魚列嶼歸屬考』（平成六年）である。しかし呉天穎氏を始めとして誰も「臺灣東北側の島」が尖閣だと證明したことはない。

日本政府の調査隊は、この報導よりも後の明治十八年十月三十日に尖閣諸島の魚釣島に上陸した。調査隊上陸の事實を九月六日の『申報』が報じたのでないことは言ふまでもない。

『申報』に引く『上海マーキュリー』（Ｓｈａｎｇｈａｉ Ｍｅｒｃｕｒｙ、漢字名『文匯報』）は上海の英國人による英字紙であるが、この年の原版は失はれてゐる。幸ひに近年尖閣諸島文獻資料編纂會研究員國吉まこも氏は、この年の『東京日日新聞』九月十八日版などに、九月五日『上海マーキュリー』をほぼそのまま譯載したと考へられる記事を發見した。それによれば「臺灣の東北側の島」はＭａｊａａｋａ島すなはち宮古八重山群島であった。尖閣諸島でないことが明らかになった。（註三）

筆者も香港の英字紙『Ｔｈｅ Ｃｈｉｎａ Ｍａｉｌ』九月九日第三面にほぼ原英文のまま轉載されたと考へられる記事を發見した（圖版一）。

註三　國吉まこも・石井望共著「１８８５年９月６日付『申報』記事「台島警信」に関する考察～新聞報道の面から～」（上中下）、『八重山日報』令和元年五月九日、十日、十四日、各第四面。

forward to with so much fear.

THE Japanese flag, the *Mercury* hears from Korea, has been hoisted on the Majaakasima Group and several other islands on the east coast of Formosa, belonging to China It this be true, we wond r what steps will be taken in Peking. 'Protest,' we presume. The Majaakasima Group forms the westernmost portion of a chain of islands extending it an easterly and a north-easterly direction from Formosa to the southern extremity of the Japan islands. The islands lie between the parallels of 24 ° 0′, and 5 ° 6′, N., and the meridians of 122 ° 55′, and 125 ° 30′, E.

At the Council Board Room, Shanghai, on

圖版一　『Ｔｈｅ Ｃｈｉｎａ Ｍａｉｌ』千八百八十五年九月九日第三面、大英圖書館製作マイクロフィルム ＭＣ一三二二

これを上記『東京日日新聞』では次のとほりに譯してゐる。

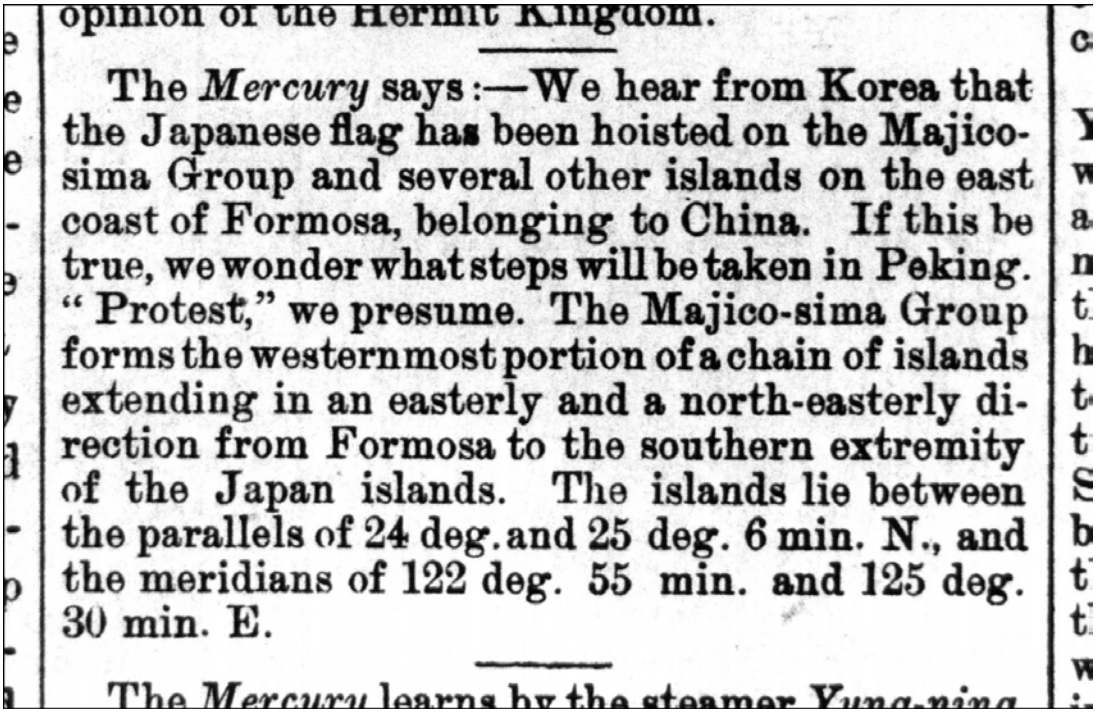
「朝鮮より報道する所に據れば、日本國旗をＭａｊａａｋａｓｉｍａ（マジーカシマ）群島并に他の諸島に樹（た）てたり。此諸島は臺灣の東岸にありて、支那に屬するものなり。此事果して實説にてあらば、驚き入りたる次第なり。北京は如何なる手段を取るべき乎。駁議（プロテスト）を爲すなるべしと思はる。抑（そもそ）もマジーカシマ群島は臺灣の北東方向より日本島の極南に連なりたる諸島の極西端に在りて、北緯二十二度より二十五度六分、東經百二十二度五十五分より同三十分の間に位する諸島なり。」

『Ｔｈｅ Ｃｈｉｎａ Ｍａｉｌ』の記事と『東京日日新聞』の記事を見比べると、一部緯度經度の記述などが異なるが、これらはほぼ原英文からの直譯・轉載と考へられる。

九月十日には『Ｈｏｎｇ Ｋｏｎｇ Ｄａｉｌｙ Ｐｒｅｓｓ』第二面でもこの記事を轉載し、但しＭａｊａａｋａをＭａｊｉｃｏに改め、北緯五度六分を二十五度六分に改めてゐる（圖版二）。『東京日日新聞』の東經「同三十分」は「百二十五度三十分」を、「北緯二十二度」は「北緯二十四度」をそれぞれ誤認したと考へられる。

當時歐洲各國所製の水路誌及び地圖等では、宮古八重山諸島を併せて「Ｍａｊｉｃｏ」「Ｍｅｉａｃｏ」等と標記するのが通例であった。西暦千八百七十三年英國海軍『Ｃｈｉｎａ Ｓｅａ Ｄｉｒｅｃｔｏｒｙ』第四冊百三十五頁ではＭｅｉａｃｏとし、經緯度は『Ｈｏｎｇ Ｋｏｎｇ Ｄａｉｌｙ Ｐｒｅｓｓ』と同じである。

圖版二　『Ｈｏｎｇ Ｋｏｎｇ Ｄａｉｌｙ Ｐｒｅｓｓ』千八百八十五年九月十日第二面、大英圖書館製作マイクロフィルムＭＣ一三二四

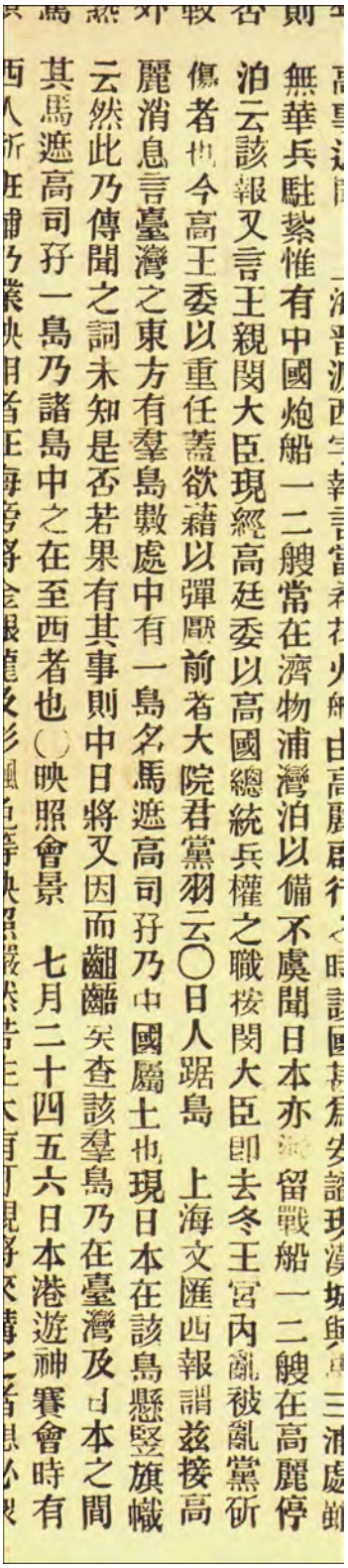


opinion of the Hermit Kingdom.

The *Mercury* says:—We hear from Korea that the Japanese flag has been hoisted on the Majico-sima Group and several other islands on the east coast of Formosa, belonging to China. If this be true, we wonder what steps will be taken in Peking. "Protest," we presume. The Majico-sima Group forms the westernmost portion of a chain of islands extending in an easterly and a north-easterly direction from Formosa to the southern extremity of the Japan islands. The islands lie between the parallels of 24 deg. and 25 deg. 6 min. N., and the meridians of 122 deg. 55 min. and 125 deg. 30 min. E.

The *Mercury* learns by the steamer *Yung-ning*

圖版三　香港『循環日報』第四千五百四十一號、千八百八十五年九月十一日第二面、東京大學明治新聞雜誌文庫所藏、N三―六―三：N九九・二



〈清國人は領土の存在を信ぜず〉

また筆者は香港の漢字紙『循環日報』九月十一日（四千五百四十一號）第二面にも同じ記事の譯文を發見した（圖版三、註四）。書き下せば次のとほり。

「日人、島に踞す。上海文匯西報に謂はく、ここに高麗の消息に接す、言はく臺灣の東方に群島數處有り、中に一島有り、マチェコシマと名づけらる、乃ち中國の屬土なり。現、日本、該島に在りて旗幟を懸竪すと云ふ。然れども此れ乃ち傳聞の詞にして、未だ是か否かを知らず。もし果たして其の事有れば、則ち中日まさに又た因って齟齬せんとす。査するに該群島は乃ち臺灣及び日本の間に在り。其のマチェコシマ一島は乃ち諸島中の至西に在る者なり。」

ここで經緯度は削除され、その一方で、原文に無かった「此れ乃ち傳聞の詞にして、未だ是か否かを知らず」といふ句をわざわざ插入し、意外感を示してゐる。列強の領土爭ひの動向は常に報じられ、この記事の同じ紙面でも日本軍が朝鮮半島に駐留してゐることを報じるなど、日本の動向に意外性は無く、それよりもこの海域のマチェコシマ（Ｍａｊｉｃｏｓｉｍａ）なる自國領土の存在と名稱が初耳だったためである。清國では福建海防官が八重山乃至沖繩鹿兒島の位置すら理解してゐなかったことは、千八百九十三年の井澤彌喜太漂流史料などに見られる（註五）。

註四　豫備調査の際、國吉まこも氏に助言いただいた。お禮申し上げる。

註五　いしゐのぞむ「尖閣胡馬島日清往復公文詳解並雜録」、『長崎純心大學言語文化センター研究紀要』第四號、平成二十七年三月。又「石井望ＶＳ任天豪、日清公函能説明釣魚臺新史實嗎？」、平成二十八年五月十五日、『風傳媒』。又「重現釣魚臺歴史情境」、平成二十八年六月十五日、臺灣『民報』。

上記『申報』でも、原英文に記載のあった「チャイナに屬する」の句を削除した上で、「何の意見か知らず、まづは掲載して續報を待つ」と懷疑の語を插入してゐることが注目に値ひする。「何の意見」は通常の語法ならば日本側の意圖を指すが、原英文と比較すれば北京の抗議に相當するはずの部分であり、これを譯述した『申報』は北京の抗議といふ語句を削除したと考へられる。上海人・香港人の共通認識として、臺灣東北方に占領され得る領土が存在して北京が抗議するとは思ひも寄らなかったのであらう。

また『申報』九月二十五日、第一面掲載「扶桑游記」に次のやうにある。

「……日本所屬の各島、往々にして人煙寥落たるものあり。日廷、他國に占據せらるるを恐れ、即ち海防を整頓せんと擬す。現に査（しら）べ得たり、琉球の南、臺灣の東北に大東島なるものあり。……人を留めてかしこに在りて守禦せしむ、ただ並（へい）して旗を插さざるのみ」（註六）

前記の呉天穎氏は『申報』「扶桑游記」の大東島について、「九月六日の尖閣報導と全く異なってゐて、中國領土としての尖閣は、日本の大東島と明確に區別されてゐる」と主張する（註七）。しかし實際は『申報』自身こそ兩者をほぼ同一視してゐる。なぜなら九月二十五日「扶桑游記」では臺灣から遙かに遠い大東島をわざわざ「臺灣の東北」とするとともに、文末にも「ただ旗をたてざるのみ」と追記してあり、九月六日の「臺灣東北」「日旗を懸く」の「後聞」（續報）であると讀者に暗示してゐる。つまり『申報』は『上海マーキュリー』の煽動が實は日本の島だったと理解して警戒を解いたと解せられる。呉天穎氏は後に『甲午戰前釣魚列嶼歸屬考』増訂版（平成二十五年）で、「扶桑游記」を論じた段落全文を削除した。秘かに誤りを悟ったがゆゑであらう。

『上海マーキュリー』が「Ｃｈｉｎａに屬し、北京が抗議するだらう」としたことについて、『東京日日新聞』及び『大阪朝日新聞』は憤怒した。『東京日日新聞』によれば、

「日本の版圖内に日本の國旗を樹（たつ）る百千旒（りう）に及ぶも、只我が欲する所に任す。北京に何の關繋あらんや。」

とある。また、『大阪朝日新聞』九月二十二日第二面によれば、

「日本が我が國旗を掲げやうが城郭砲台を築かうが北京政府に於いて毫も異議を入るる理あらんや」

とある。これらは上海・香港の新聞とは全く對照的な意識であり、領域の實態にも符合する。

註六　原文「日本所屬各島、往往有人烟寥落者。日廷恐被他國佔據、擬即整頓海防。現査得琉球之南・臺灣之東北有大東島者。……留人在彼守禦、惟並不插旗耳。」

註七　呉天穎『甲午戰前釣魚列嶼歸屬考』、平成六年版、第百六頁。

〈別路線でも情報傳播〉

『上海マーキュリー』所載の宮古八重山情報は、李氏朝鮮から上海を經て香港に傳はったが、筆者は別路線で東京からロンドンを經てマンチェスターに傳はったことを發見した。消息はまづ『The London and China Telegraph』の同年十月二十三日第二面に掲載された（圖版四）。和譯すれば以下のとほり。

「極東消息摘要、日本、東京及び横濱。九月六日までの最新情報が到着した。（中略）日本がMeiacoshima諸島の領有を實施したことが布告された。この諸島はもとから琉球に朝貢してゐる。琉球が日本帝國に正式に沖縄縣として編入されたので、早晩日本政府が琉球の南の小屬地を統治に入れると考へるのは合理的であった。蓋しイギリスが巨文島を占領した上に、ロシアが濟州島を奪取するといふ疑ひがあり、同國と朝鮮との保護條約が報導され、ドイツが定常政府を持たず國旗の保護を受けてゐなかった島嶼を迅速に編入したため、日本も行動を急いだのだらう。」

圖版四　『The London and China Telegraph』、千八百八十五年十月二十三日第二面、大英圖書館所藏原紙、Newspapers：二五-三〇四四、石井望撮影

Summary of News from the Far East.

JAPAN.

—o—

TOKIO AND YOKOHAMA.

The present mail brings advices to Sept. 6, and these have been anticipated by the mail received, *via* San Francisco, on the 19th inst.

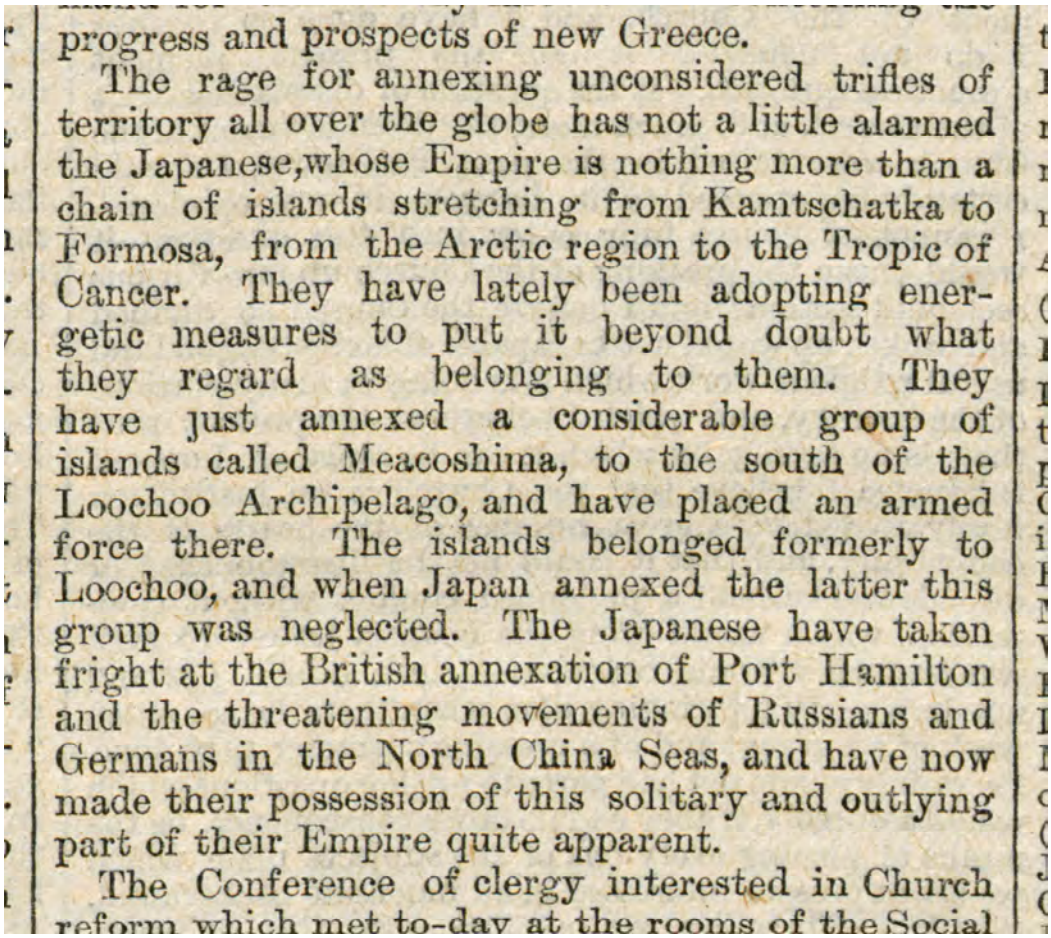
It is announced that Japan has taken possession of the Meiaco-shima group of islands. These have always been tributary to the Loochoos, and when those islands were formally incorporated into the Japanese Empire as the Okinawa-ken it was only reasonable to suppose that the Japanese Government would, sooner or later, take steps to bring the little southern dependency of Loochoo under their administration. Possibly the seizure of Port Hamilton by England, the alleged intention of Russia to acquire Quelpart, the reported Protectorate Treaty by that Power with Korea, and the rapid appropriation by Germany of islands possessing no settled government and under the protection of no civilised flag, may have precipitated the action of Japan.

We believe, says the *Japan Mail*, "that the arrangements for

この年、英國は朝鮮半島の南側の巨文島を占領してゐた。濟州島はこの時、ロシアの狙ふ所だと噂されてゐた。保護條約とはロシア朝鮮間の密約の陰謀であり、この年の七月二十七日に同じ『The London and China Telegraph』第十一面で報導されてゐた。ドイツが島嶼を占領したのは南太平洋のキャロライン諸島を指し、同紙は八月十五日第八-九面で占領の可能性を報じ、二十四日第九面で占領確定と報導したばかりであった。また十月二十三日の同じ紙面では、ドイツが朝鮮半島西南側の所安群島（Crichton Group）に國旗を立てるだらうとの不確定情報を報じてゐる。

よって同紙の認識としては、「イギリス・ロシアの極東進出をうけて、日本は八月後半にドイツのキャロライン諸島情勢が明らかになった前後から九月五日までの間に宮古八重山の領有を實施した」とみなしてゐたと考へられる。同紙はこれが清國領土に關はるといふ認識を有してゐなかった。

八日後の十月末日、イギリスの大手『マンチェスター・ガーディアン』紙もMeaco諸島の記事を掲載した。『The London and China Telegraph』にもとづいて書いたと考へられる。大手紙に報じられたことは相當の重みがあるが、この年の『ガーディアン』原紙を所藏する圖書館は少ない。このたび大英圖書館にて高精度電子圖像を入手した（圖版五）。



progress and prospects of new Greece.

The rage for annexing unconsidered trifles of territory all over the globe has not a little alarmed the Japanese, whose Empire is nothing more than a chain of islands stretching from Kamtschatka to Formosa, from the Arctic region to the Tropic of Cancer. They have lately been adopting energetic measures to put it beyond doubt what they regard as belonging to them. They have just annexed a considerable group of islands called Meacoshima, to the south of the Loochoo Archipelago, and have placed an armed force there. The islands belonged formerly to Loochoo, and when Japan annexed the latter this group was neglected. The Japanese have taken fright at the British annexation of Port Hamilton and the threatening movements of Russians and Germans in the North China Seas, and have now made their possession of this solitary and outlying part of their Empire quite apparent.

The Conference of clergy interested in Church reform which met to-day at the rooms of the Social

圖版五　『The Manchester Guardian』千八百八十五年十月三十一日第七面、British Library, System number: 〇一三八九九二九〇、Newspapers: 三五八-三五一九一

和譯すれば以下のとほり。

「全世界のこれまで顧みられなかった微小領域が併合されることに憤怒し、日本人は少なからず警戒してゐる。彼らの帝國はただ一筋の列島線として、カムチャッカからフォルモサ（臺灣島）まで、北極地區から北回歸線まで伸びてゐる。彼らは近來積極的措置を施し、彼らが認定する疑ひ無い屬地を取り込んでゐる。彼らは現在、Ｍｅａｃｏｓｈｉｍａ（宮古八重山諸島）といふ一大群島を琉球諸島の南部に併合し、軍を配置した。この群島はもともと琉球に屬してゐたが、日本が琉球を併合した際には輕視されてゐた。英國が巨文島を併合し、ロシアとドイツもシナ海北部などで威嚇的な行動を取ってゐるため、日本人は恐怖し、このたび帝國の外縁的僻地の領有を明確化したのである。」

同じ文面は、そのまま千七百三十二年創刊の週刊地方紙『Ｔｈｅ Ｄｅｒｂｙ Ｍｅｒｃｕｒｙ』十一月四日第八面にも轉載された（圖版六）。

當時の大新聞に宮古八重山情報が出現することはそもそも極めて稀であるから、この時に一方で李氏朝鮮-上海-香港、今一方で東京-ロンドン-マンチェスターといふ兩路線で同時に傳播したのは、日本の同一情報源から出たと考へられる。上海で明治十八年に尖閣が報導されたといふ虚構は、久しく學會や政界、海外にまで廣がってゐるため、このたび兩路線ともに尖閣ではなかったと確認したことは、大きな成果であらう。

圖版六　『Ｔｈｅ Ｄｅｒｂｙ Ｍｅｒｃｕｒｙ』十一月四日第八面、大英圖書館製作マイクロフィルム ＭＦＭ・Ｍ三一六〇〇

the Treasury Bench in the House of Commons.

The rage for annexing unconsidered trifles of territory all over the globe has not a little alarmed the Japanese, whose Empire is nothing more than a chain of islands stretching from Kamtschatka to Formosa, from the Arctic region to the Tropic of Cancer. They have lately been adopting energetic measures to put it beyond doubt what they regard as belonging to them. They have just annexed a considerable group of islands called Meacoshima, to the south of the Loochoo Archipelago, and have placed an armed force there. The islands belonged formerly to Loochoo, and when Japan annexed the latter this group was neglected. The Japanese have taken fright at the British annexation of Port Hamilton and the threatening movements of Russians and Germans in the North China Seas, and have now made their possession of this solitary and outlying part of their Empire quite apparent.

The death of the Duke of Abercorn throws some of

『上海マーキュリー』の文中ではＭａｊａａｋａのみならず、「並びに他の諸島」に言及してゐる。これはロンドン路線に無い情報である。この時、日本政府は大東諸島及び尖閣諸島の調査を計劃し、正式に國土に編入する方針であった。八月下旬、汽船を派遣して大東諸島を調査し終り、九月一日に該船は那覇港に戻った。一方の尖閣諸島はずっと後の十月三十日にやっと上陸調査したため、上海及びロンドンの兩路線情報より後のことであった。兩路線の"Flag has been hoisted"と"Japan has taken possession"とは、ともに現在完了形であり、日本政府の行動が遠い過去でなく、また近く實現しようとする計劃でもないことを示す。兩路線がともに近未來の計劃を誤記して現在完了形にするとは考へにくい。よって現在完了句中の「並びに他の諸島」は、この時の日本政府の状況の内では大東諸島を指す可能性しか有り得ず、尖閣諸島を指す可能性は無い。また、先述の『申報』は原英文の「並びに他の諸島」の句を削除し、『循環日報』も日本が旗を立てたのは「數處」の中の「島」であるとして、その地を數處でなく一島マチェコシマとする語意になってゐる。

〈外交交渉の動向〉

國吉まこも氏の研究によれば、沖縄縣令西村捨三はこの年（明治十八年）五月に宮古八重山諸島を巡回し、それが八月十日『時事新報』でイギリス、ロシアに對抗する意圖として報じられた。さらに同氏の研究によれば、この年（明治十八年）七月三日までに、宮古八重山の領有確立に向かふ日本政府の意志を、すでに井上馨外務卿が英國駐日公使プランケットに對して機密談話で傳へてをり（註八）、また場合によっては同じ意志を同時に李鴻章に對しても表明する準備をしてをり（註九）、その意志が大東島調査につながったと考へられる。但し李鴻章は琉球に干渉する意志を示さなかったため、日本側はこれを表明しなかった。

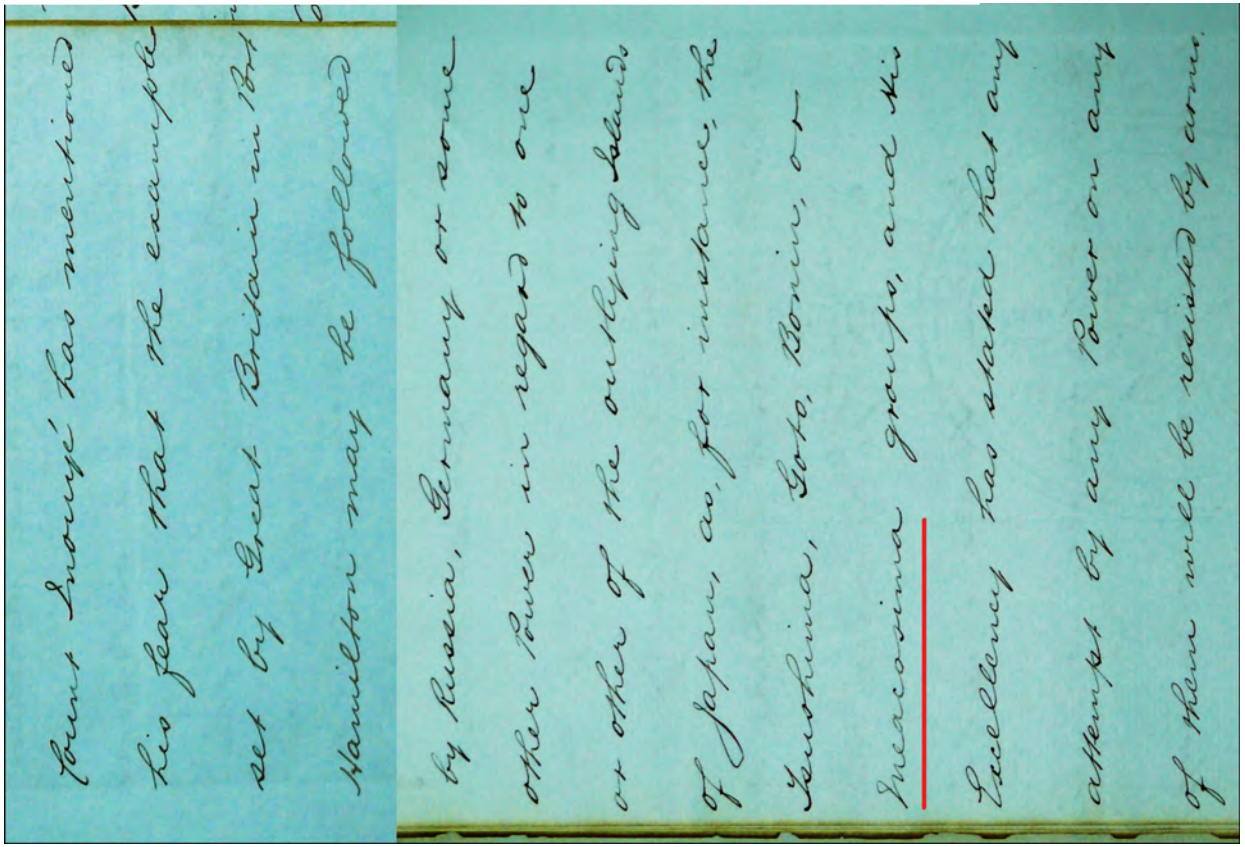
七月のプランケット記録の寫本（通稱ＦＯ四六／三三二）はつとにマイクロフィルムで公開され、先行研究で少々言及されてゐたが（註十）、文字つづりの重要性に鑑み、このたび鮮明に撮影した（圖版七、註十一）。宮古八重山のローマ字はＭｅａｃｏｓｉｍａとなってゐる。

註八　八重山日報「尖閣・対論、日本牽制か、列強牽制か～～明治１８年、八重山をめぐる情報戦」、國吉まこも・石井望、令和二年一月一日、第二十、二十一面。

註九　「日清交際史提要・善後商議」第七十八頁所引、井上馨より北京榎本公使に訓令。

註十　Victor Gordon Kiernan「British diplomacy in China, 1880 to 1885」、昭和四年、第二百十頁、注三。このうち七月三日については、大澤博明、平成十年。

註十一　部分活字「Both to me and to others Count Inouyé has mentioned his fear that the example set by Great Britain in Port Hamilton may be followed by Russia, Germany or some other Power in regard to one or other of the outlying Islands of Japan, as, for instance, the Tshushima, Goto, Bonin, or Meacosima groups, and his Excellency has stated that any attempt by any Power on any of them will be resisted by arms. Steps have been lately taken to place Police and soldiers in these places, so as to prove that they form part of the Japanese Empire, and thus to deprive Foreign Powers of the excuse of these Islands not being defended by the Nation to which they belong.」。參考：「British Documents on Foreign Affairs Asia1860-1914」Part I, Series E, ASIA Volume 2 Korea, the Ryukyu Islands and North-East Asia 1875-1888, p. 293, University Publications of America.


Both Inouyé has mentioned
his fear that the example
set by Great Britain in Port
Hamilton may be followed
by Russia, Germany or some
other Power in regard to one
or other of the outlying Islands
of Japan, as, for instance, the
Tsushima, Goto, Bonin, or
Meacosima groups, and his
Excellency has stated that any
attempt by any Power on any
of them will be resisted by arms.

圖版七　Plunkett volume 6, folio 3. *Foreign Office Political and Other Departments, Japan*. FO46/332, folio 3. 英國公文書館にて石井望撮影

七月三日プランケットに對する井上談話の要點は、第一にロシア、ドイツ、イギリスの極東進出に對して、井上は宮古八重山を含む島嶼防衛で對抗すると表明したこと。第二に清國がロシアの朝鮮進出を許さぬやう、井上が李鴻章に求め、日清交渉が緊密化してゐたこと。第三に朝鮮外交顧問メレンドルフの解任を清國に求め、局外の米國人を後任に推舉したこと、などである。八月十日の『時事新報』に比較すると、ドイツの動きを早くも懸念してゐることに獨自性がある。

ロシア・ドイツに對抗する意志は上述の十月のロンドンの報導と一致し、一方で清國との關係は九月の『上海マーキュリー』の挑撥的報導と一致する。『上海マーキュリー』にこれを挑撥的な形で送ったのは誰なのか、利害關係から二つの推測が可能である。第一に日本が李鴻章を動かすことを望まぬイギリス當局が挑撥した可能性がある。第二に解任されたメレンドルフが報復として挑撥した可能性もある（註十二）。

ドイツ人メレンドルフは上述のロシア朝鮮密約を推進したことが原因で、清國がこれを解任し、日本も清國に解任を求めてゐた。メレンドルフは各國の合從連衡や離間を劃策して、自分が「でしゃばり」（岡本隆司氏評）たがる人物であるから、個人的に報復しようとしたことは有り得る。

プランケットの記録では宮古八重山諸島がＭｅａｃｏと標記されるが、『上海マーキュリー』ではＭａｊａａｋａと誤記してゐるため、イギリス政府が『上海マーキュリー』の挑撥的報導を誘導したことは考へにくい。「ａａ」といふ標記はドイツ系の人物が地誌を確認せずに急ぎ新聞社に送ったと考へられる。また、イギリスが懸念を有するならば焦らず井上馨及び李鴻章に直接傳へることが可能であり、東京からロンドンへの英紙の報導も挑撥的ではない。

いづれにせよ『上海マーキュリー』の挑撥的報導が『東京日日新聞』等で次々に取り上げられたため、明治政府は大いに警戒した。その後、明治政府は計劃通り尖閣諸島の調査を行なったが、外務卿井上馨は「公然國標を建設」することを避けるやう、内務卿山縣有朋に進言した。結局、千八百九十四年に正式編入の手續きが開始され、千八百九十五年一月十四日に編入手續きが完了した。しかし清國朝野では上述の通り一度も尖閣諸島を問題視したことは無く、八重山についての關心も高まらず、臺灣東北側に島嶼領土が存在するといふ認識はなかったと考へられる。全ては明治政府側だけの杞憂に過ぎなかったことが今回の一連の研究により明らかになった。

註十二　註八に同じ。

〔參考研究〕

呉天穎『甲午戰前釣魚列嶼歸屬考』社會科學文獻出版社平成六（千九百九十四）年初版、中國民主法制出版社平成二十四（二千十二）年增訂版。

大澤博明「明治前期の朝鮮政策と統合力ーそのアジア主義的傾

向を中心に―」、『年報政治学』平成十（千九百九十八）年、四十九巻、ｐｐ．七十一-九十。
岡本隆司「メレンドルフの怪」、創文社『創文』、ｐｐ．一-六、平成十四（二千二）年。
岡本隆司『属国と自主のあいだ　近代清韓関係と東アジアの命運』、名古屋大學出版會、平成十六（二千四）年。
岡本隆司『世界のなかの日清韓関係史　交隣と属国、自主と独立』、講談社、平成二十（二千八）年。
國吉まこも「１８８５年田代安定の八重山調査と沖縄県の尖閣諸島調査」、沖縄大學地域研究所『地域研究』第十號、平成二十四（二千十二）年九月。
國吉まこも・石井望共著「尖閣諸島雑考」（上下）、『八重山日報』平成二十七（二千十五）年八月二十七日、九月一日、各第四面。
石井望「尖閣獺祭録」、『八重山日報』連載第三十二回及び三十九回、平成二十八（二千十六）年五月十四日、六月七日。
石井望「尖閣大航海時代」第十八回「ロンドンの新聞も、尖閣問題ではない」、『八重山日報』平成三十（二千十八）年二月二十五日第六面。
國吉まこも「尖閣諸島について」、平成三十（二千十八）年三月二十六日講演、日本國際問題研究所。
いしゐのぞむ「東亜海洋爭權叢説」、長崎純心大學大學院『人間文化研究』十七號、平成三十一（二千十九）年三月。
石井望「明治十八年尖閣のデマ破れたり～～倫敦の新聞に新史實」、『八重山日報』平成三十一（二千十九）年四月十三日第四面。
國吉まこも・石井望共著「１８８５年９月６日付『申報』記事「台島警信」に関する考察～新聞報道の面から～」（上中下）、『八重山日報』令和元（二千十九）年五月九日、十日、十四日、各第四面。

2、三浦按針の朱印船は尖閣周邊海域を通航

〔成果概要〕

オックスフォード大學所藏、三浦按針（ウィリアム・アダムス）の朱印船の航海日誌原本を高精度撮影し、船員の日誌も撮影した。日誌中には當時の尖閣諸島の名稱と同じ「トリシマ」が記載されている。三浦按針らの朱印船は幕府の朱印状を受けて尖閣周邊海域を自由に航行することができたが、明國沿岸島嶼から西側（大陸側）に進入することはできなかった。尖閣西方（明國東方）海域に於ける明國の海防範圍の實態を示してゐる。高精度撮影全本が本邦にもたらされたことは、三浦按針をめぐる歴史研究にも大いに資するであらう。

〔解説〕

明國の領土が大陸海岸線までと、當時としては法的に定められ、基本的に島嶼を含まなかったことは、明國の官製地誌諸本に見られる。明國・清國の海禁は、法的な海岸國境線を基本として、時代ごとの海防力の進退に應じて海岸線の外側や内側に海禁線すなはち海防線が遷移し、それを海禁令として布告した。

十六世紀中期のいはゆる後期倭寇時代、海禁線はほとんど喪失状態であり、名目的國境線が海岸線であった。しかし後期倭寇終息後、日本の朱印船時代が始まるまでの間に（千五百六十年代～八十年代）、福建海防線は大陸海岸から沿岸島嶼（臺灣海峽西部）まで前進してゐた（註十三）。

そして豐臣秀吉・德川家康らの朱印船時代、多くの日本船が朱印状を受けて東南アジアと貿易し、その通路として第一に臺灣海峽、第二に臺灣島東岸といふ兩路があったことが檢定教科書等に圖示されてゐる。

第一路は日本を代表する航海書『元和航海書』（千六百十八年成書）や『按針術』など諸史料に見え、福建沿岸の東湧（タゲン）・烏丘（ウクウ）・澎湖（ヒャウ・ペウ）・南澳坪（南澳彭、ラマウビイ）等の島が經由地として記載される。明國側でもほぼ同じ福建沿岸列島を倭船の最前線としたことが、千五百九十四年に官命で鄧鐘（とうしょう）が編纂した『籌海重編』（圖版一）など多數の古書に見える。日明雙方の認識はほぼ一致してゐた。

第二路は、『按針術』のみならず、著名な『寛文航海書』（十七世紀後半成書）など諸史料に見え、五島列島から西南に東シナ海を越えて、レイシ（レイス）及びトリシマから成る尖閣諸島を目指し、更に南南西に與那國島・タバコ島（臺灣東南の蘭嶼）等を經由してマニラに到着する。この路線は明國側史料に全く出現しない。

註十三　いしゐのぞむ「尖閣釣魚列島雜説七篇」、頁五十一至六十八、長崎純心大學比較文化研究所『ことばと人間形成の比較文化研究』所收、平成二十五年刊。

圖版一　天理大學藏、『籌海重編』卷一「萬里海圖」より。『天理圖書館稀書目録・和漢書之部』第三册第千二百七番。東湧に「倭船多くここより過ぐ」と注記あり。

圖版二　福建沿岸島嶼及び航路概念圖

別途、琉球福建貿易では、復路に西の福州から東湧・臺灣北方諸島・尖閣諸島を經て東の那覇に到達するのが基本路線であったことが、琉球の程順則『指南廣義』（千七百八年）等に記録されてゐる。（以上、圖版二）。

明國は日本に對して海禁を實施してゐたため、第一路は基本的に大陸沿岸島嶼を經由して、明國の港に停泊しない。千六百十四年末、平戸イギリス商館から出發した三浦按針の朱印船は大陸に接近した際、故障修理のため明國に入港しようとしたが、日本の乗組員が猛反對したため、東航して琉球に入港した。朱印船は倭寇として扱はれて殺されるがゆゑである。

三浦按針の船員ウィッカムの記録の寫本には大陸まで接近した距離「３０ｌｅａｇｕｅｓ」（百五十ｋｍ前後か）の文字が見え、また船中の日本人が大陸接近に決して同意（ａｇｒｅｅ）しなかったことも見える（圖版三、註十四）。この航海から二年あまり後に三浦按針も回顧し、チャイナまで「ｎｏｔ ａｂｏｖｅ ２０ ｌｌｅａｇｓ」（百ｋｍ前後以内）に接近したが、チャイナは最大の強敵であったからチャイナで船を修繕し得なかったと述べる（圖版四、註十五）。それぞれ「２０」「３０」の文字が寫本に見える。

日本人が明國境内に立ち入ると倭寇として往々殺されるといふ一例としては、同時代の千六百十三年、廣東省の海道副使（海防兼外務長官）による「蓄倭に諭する碑」に、

「倭性狡鷙、向不通貢、輕入内地者必誅、朝廷法制甚嚴。」（註十六）

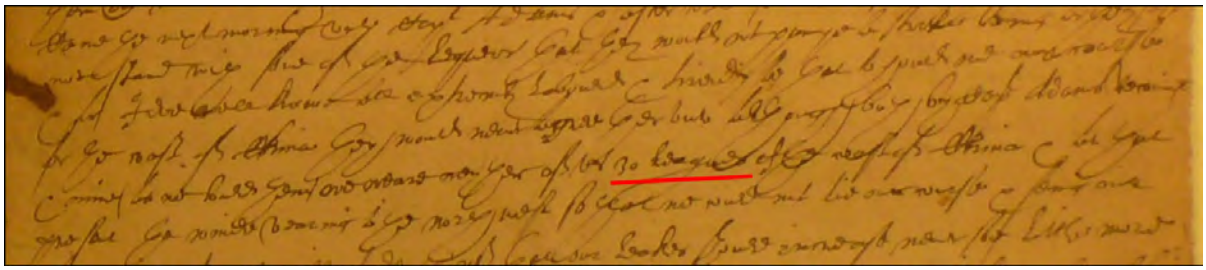
（倭性狡鷙にして、さきより通貢せず。内地に輕入する者は必ず誅すること、朝廷法制はなはだ嚴し）

と述べられ、この時はポルトガル居留地マカオの日本人が驅逐された。この禁制を前提とするマカオ情勢については、日本の船員間に最新情報として知られたはずであるが、平戸英商館文書にこの時のマカオ情報は見當たらない。

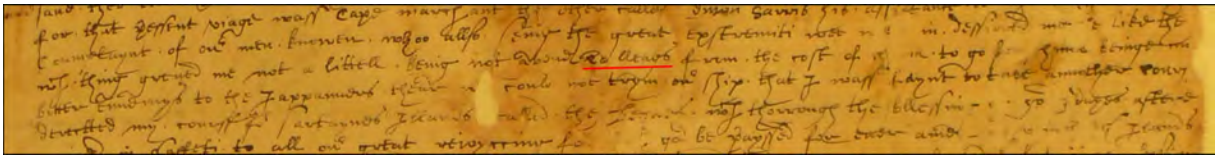
註十四　大英圖書館藏、India Office Record E/3/2, Book II, folio 152, document no.216。活字本：Farrington 1991『The English Factory in Japan』no. 93, pp.273-274「Richard Wickham at Amami O-shima to Richard Cocks at Hirado, 23 December 1614」。ファリントン釋字：「all extremly labourd & tired, soe that to hould one our course for the coast of China, they would never agree therunto, although both by Capt' Adams' reconing & mine (as we tould them), we weare neyther of us 30 leagues of the coast of China.」

註十五　大英圖書館藏、India Office Record E/3/4, Book II, folio 143, document no.428。活字本：Farrington 1991『The English Factory in Japan』no. 230, pp.568-571「William Adams at Hirado to Sir Thomas Smythe in London, 14 January 1617」。ファリントン釋字：「...being not above 20 lleags from the coast of Chinna, to go for China. Beinge most bitter ennemys to the Jappanners, thear we coud not trym our ship.」。現代語と和譯は『三浦按針１１通の手紙』第八通。

註十六　上海 The Presbyterian Press、千八百八十七年『The Chinese Recorder』ｖｏｌｕｍｅ １８、第二百十九頁「Historical Landmarks of Macao」。



圖版三　三浦按針朱印船員リチャード・ウィッカム書翰、大英圖書館にて筆者撮影、下線も筆者
IOR E/3/2, Book II, folio 152.



圖版四　三浦按針書翰、大英圖書館にて筆者撮影、下線も筆者。
IOR E/3/4, Book II, folio 143.

しかし日本人の猛反對が無ければ三浦按針の船は大陸に向かはうとしたのであり、また三浦按針の朱印船航海はこの時が最初であるから、千六百十四年の時點で三浦按針は明國情勢に疎かった可能性が高い。このころ平戸の唐人李旦は明國で自由に交易できると詐稱して英商館から投資を引き出し、その損失が英商館早期閉鎖の原因となった。平戸英商館も明國情勢に疎かったことが分かる。

その時代のさなかの西暦千六百十六年、德川家康が長崎代官村山等安に命じて派遣させた朱印船の武將明石道友（あかしだういう）が、長崎から朱印船航路第一路の最重要經由地であった東湧に到達し、明國からの偵察員董伯起（とうはっき）に出逢った。日本側は「明國の境界内の一草一粒をも犯すつもりは無い」と表明したことが、黄承玄「題報倭船疏」、曹學佺「湘西紀行」などに見える（註十七）。朱印船航路について、日本側から明國に對して航路上の現地に於いて現状維持を要求したのである。

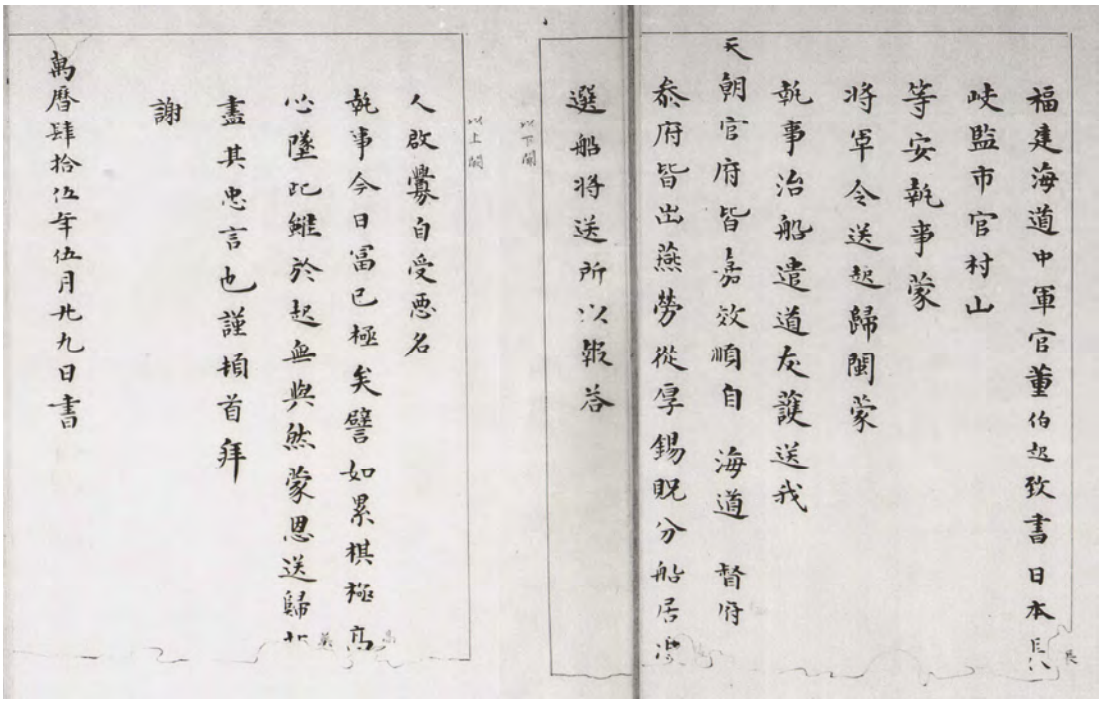
翌年（千六百十七年）、明石道友は福建に出向いた。明國福建當局は前年の状況をうけて、福建沿岸最遠列島の最北端から最南端まで六島を擧げ、「これより内を犯してはならぬが、この外側は諸國が共用してゐる」と表明し、皇帝にも報告した。このことは、明國朝廷の記録『皇明實録』などに見える（註十八）。六島は東湧・烏丘・澎湖など、もともと朱印船の通路となってゐた島々である。明國は前年の日本側の實地確認に對して、これを追認したのである。

なほ『皇明實録』では福建側の強硬な語氣で記録されてゐるが、その中で福建高官が引用した典故は漢が匈奴に敗れた歴史であり、日本側に手加減を求めてゐる。この後に董伯起から明石道友らに送られた感謝状でも、福建の高官が總出で明石を出迎へたことを記録する（圖版五、註十九）。

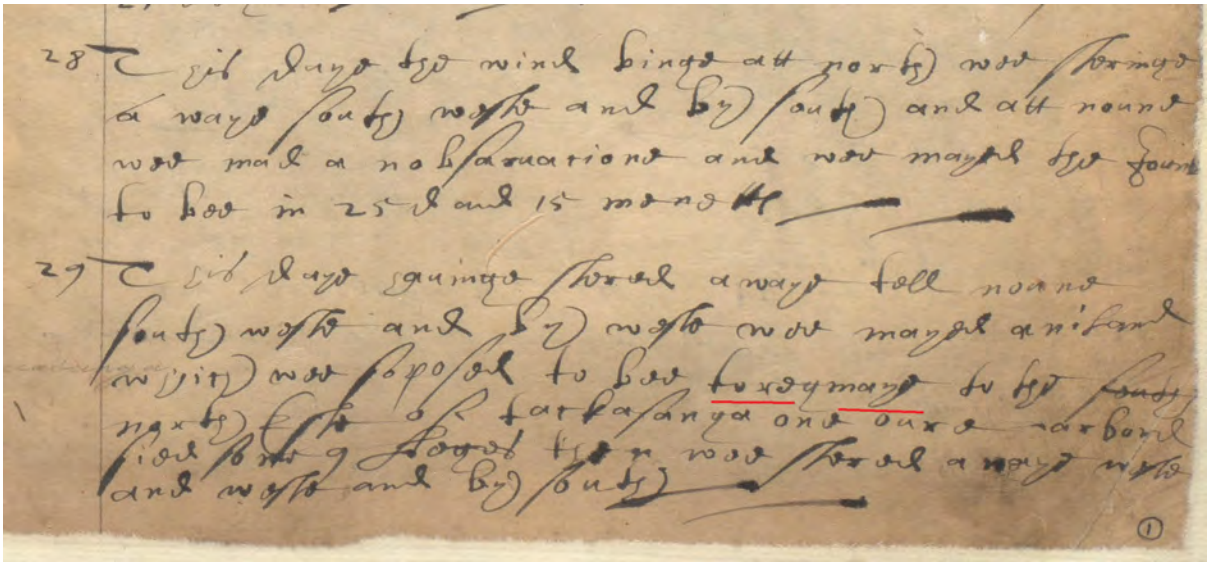
註十七　黄承玄『盟鷗堂集』卷二、第三十一葉「題報倭船疏」、崇禎元年序の刊本、國立公文書館藏、漢一七二六八、集部四九-二四。曹學佺『曹大理集』第十二册「湘西紀行」下卷附録「閩中通志雜論・倭患始末」、第四十五葉、明國刊本、國立公文書館藏、三一七-一四九號。

註十八　『皇明實録』萬暦四十五年八月。國立公文書館藏（舊紅葉山文庫藏）寫本、漢一三七九八、史部五九-一、全六百八十七册中の第六百七十一册。

註十九　明國福建海道中軍官董伯起書翰、東大史料編纂所藏、武田文書三二六四〇一六八、請求記號三〇七一・六四-七三-二、武田芳太郎舊藏による寫本。書き下し「將軍の令を蒙り、（董伯）起を送って閩に歸らしむ。……我が天朝の官府、みな效順を嘉（よみ）し、海道・督府・參府よりして、みな出でて燕勞し、厚きに從って貺を錫（たま）ひ、船を分けて澳に居せしめ、船を選んで將送す。（恩義に）報答する所以なり。」



福建海道中軍官董伯起致書日本
岐監市官村山
等安執事蒙
將軍令送起歸閩蒙
執事治船遣道友護送我
天朝官府皆嘉效順自海道督府
叅府皆出燕勞從厚錫賜分船居港
選船將送所以報答
人啟釁自受惡名
執事今日富已極矣譬如累棋極高
心隆卧雖於起無與然蒙恩送歸
盡其忠言也謹頓首拜
謝
萬曆肆拾伍年伍月九九日書



28 This days the wind bings att north wee stoomed a way south west and by south and att noone wee made a noblauation and wee maydt the found to bee in 25 d and 15 mond

29 This days gaunge shoed away tell noone south west and by west wee maydt anifand which wee supposd to bee turdymaye to the south north of tarkasanya and ouse carbonel ios bong good then wee shoed away west and west and by south

圖版五　明國福建海道中軍官董伯起書翰、東大史料編纂所藏、三二六四〇一六八

圖版六　三浦按針の朱印船往路三月二十九日、臺灣東北方の「Toregmaye」。下線は筆者。
Gift of God: Journal, Edmund Sayers, IOR/L/MAR/A/XXVI, British Library.

あたかもこの時、三浦按針の朱印船は平戸からベトナム南部に渡航して交易した。船中の平戸英商館員エドモンド・セイヤーズの航海日誌では、西暦千六百十七年の往路三月二十九日と、復路七月二十二日の條に、三浦按針の朱印船が臺灣東北方向の「Ｔｏｒｅｇｍａｙｅ」及び「Ｔｏｒｒｅｇｅｍａ」附近を航行したことを記録する（圖版六）。

按針自身の航海日誌でも、同一の年月日に臺灣よりも北側の島を望見したと述べる（註二十）。かつてロンドン圖書館所屬の研究家パーネルはこれらをＴｏｒｉｓｈｉｍａと解し、臺灣北方諸島の一つだとした（註二十一）。

しかしパーネルが氣づかなかったことは、トリシマは朱印船時代以後、尖閣の古名稱として史料に繰り返し出現するものであり（圖版七～十など）、セイヤーズのトリシマも同じく尖閣であるか、もしくは臺灣北方諸島を尖閣と誤認したと考へられる。

當時、臺灣北端の鷄籠（ケラン、キールン、今の基隆）に日本人が進出してゐたことが、同時代の張燮（ちゃうせふ）『東西洋考』卷十二などに見える。よって誤認でなく、臺灣北方諸島がもとから和名トリシマで呼ばれてゐた可能性も無いわけではない。但しそれを示す史料が無いため、可能性は極めて低く、ほぼ尖閣諸島として間違ひない。

いづれの解にしても明國の防衛海域（上述の福建沿岸列島線）の最東限の東湧よりも遙かに外側であり、その東側の尖閣航路を三浦按針の朱印船が自由に航行できたことを示す。

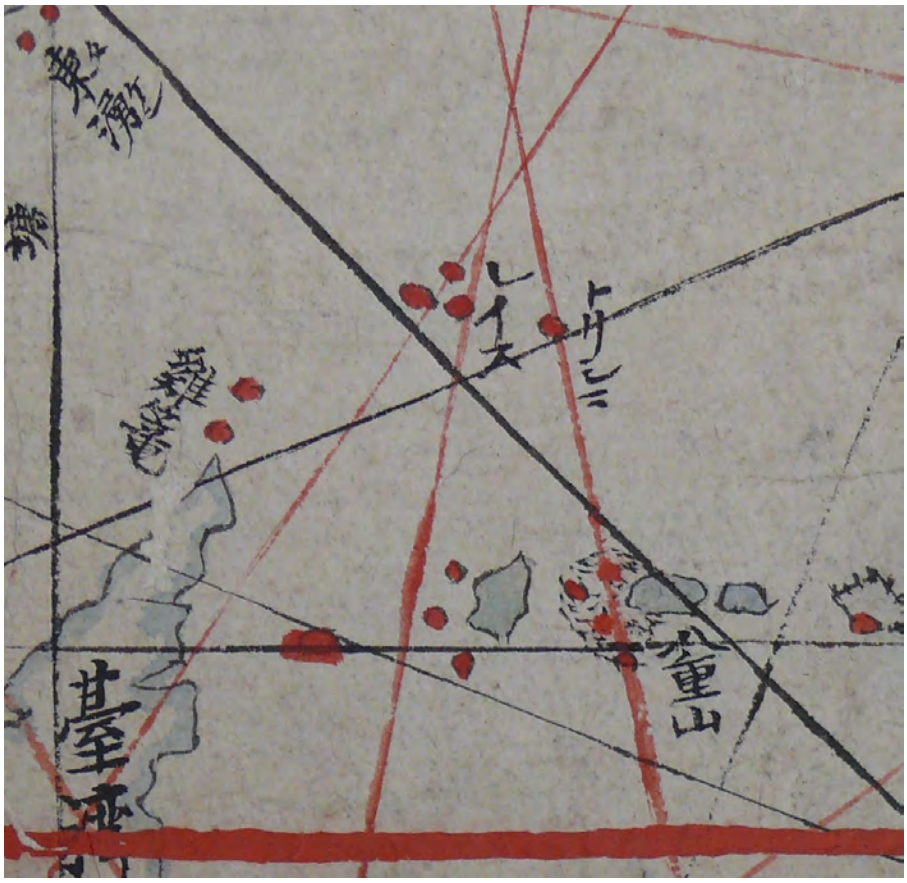
尖閣島名トリシマは明國清國史料に全く出現しない。これに對して日本側ではトリシマ・レイス（レイシ）から成る群島が、尖閣諸島の位置にかなり高精度で捉へられてゐた（盧高朗圖など、圖版七）。精度が高まった要因は、以下三航路でトリシマ・レイシは縱横に經由する海の十字路であったためと考へられる。

東西航路
（琉球福建貿易の復路。程順則『指南廣義』、圖版八）
南北航路
（朱印船貿易第二路。『按針術』下卷、圖版九）
東北東方向
（朱印船貿易第一路。『按針術』上卷、圖版十）

註二十　Christopher James Purnell,『The Log-Book of William Adams, 1614-19』、千九百十六年複製本。ｐ．二百二十七、ｐ．二百三十八。

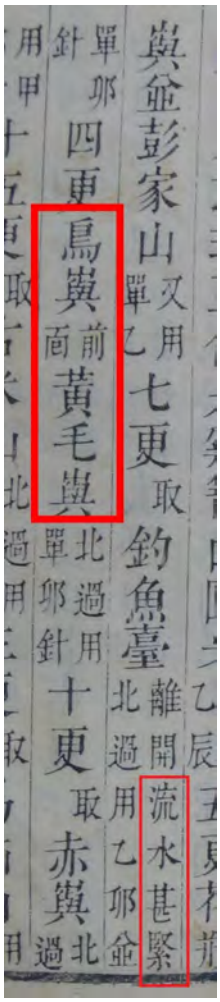
註二十一　Ｐｕｒｎｅｌｌ、同註二十、ｐ．二百八十九、ｐ．二百九十七。三月二十九日を現代英語に置き換へれば次の通り。「29: This day having steered a way till noon south-west and by west, we made an island which we supposed to be Toregmaye, to the north-east of Takasago, on our Larbord side of some 9 leagues. Then we steered a way west and west and by south.」

圖版七　盧高朗圖　トリシマ・レイス部分　グーグルと比較。長崎歴史文化博物館藏、現標題「東洋南洋航海古圖」、分類番號「縣書三-六十二-一」。全幅の右下方に署名「盧高朗」。

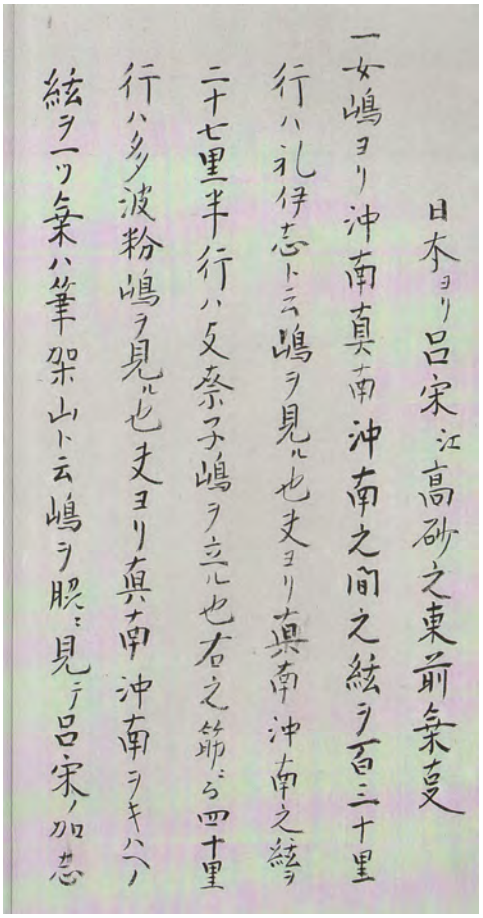


圖版八　琉球・程順則『指南廣義』康熙四十七年序の刊本、國立公文書館、漢籍史部二九二-〇一五二。釣魚臺（臺灣北方島）を離れた後、流水（黒潮支流）の東側に鳥嶼（トリシマ）と黄毛嶼（久場島か）とが至近距離でならぶ。圍みは筆者。

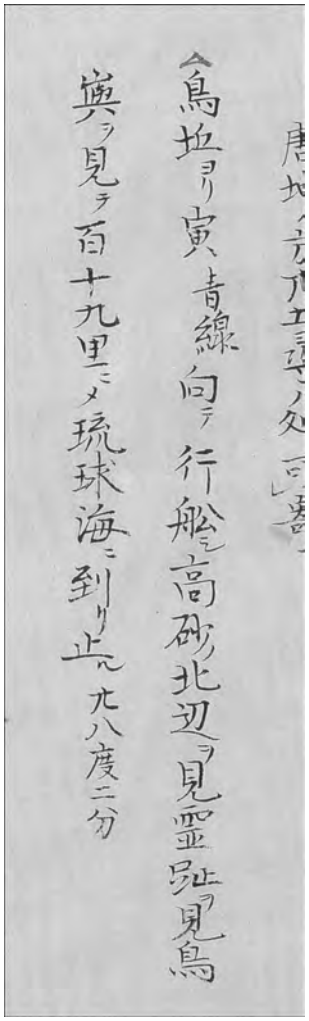
附註　文中の距離は不精確だが、釣魚臺から東へ「流水」及び四更（約百二十キロメートル）を隔ててトリシマ群島に至る。十七世紀初期セルデン圖（オックスフォード藏の漢字地圖）で流水は黒潮を指し、現代科學では臺灣北方諸島と尖閣との間に黒潮支流が流れる。釣魚臺は魚釣島ではなく、臺灣北方諸島の一つと考へられる。



圖版九　『按針(之)術』下卷　天理大學天理圖書館藏、寫本、四四〇／イ／一七／八-九　レイシ島（尖閣）からほぼ南南西に進むと与奈子（ヨナコ、與那國島）に到達する。



圖版十　『按針術』（天理大學藏）上卷



烏丘（福建中部）→臺灣（高砂）北端→レイシ（靈趾）→トリシマ（鳥嶼）→琉球北部（北緯二十八度二分）。東北東方向に一直線。

三浦按針の往路では、南北航路で南下し、トリシマから西へ轉じてゐる。三浦按針がトリシマを目撃した前後の時間系列は次の通り。

〔千六百十六年〕

村山等安が派船（平戸イギリス商館長日記五月五日、七月七日、十二日）。

村山等安の派遣した明石道友が東湧に到達し（黄承玄・曹學佺記録）、徳川家康の和平の意を通告。

明石道友、福建の偵察官董伯起を伴って歸國。

〔千六百十七年〕

三月二十九日、三浦按針の朱印船が往路でトリシマ海域を航行。

五月二十三日（陰暦四月十九日）、明石道友、董伯起を伴って福建に到達し、韓仲雍に對して朱印船航路交渉を開始。

七月一日（陰暦五月二十九日）、董伯起から明石道友に對して感謝状。

七月二十二日、三浦按針の朱印船、復路でトリシマ海域を航行。

八月三十一日（陰暦八月一日）、福建當局、明石道友に對して朱印船航路を認めたことを皇帝に上奏。

この時系列を見るに、徳川家康の遺命による明石道友派遣といふ重要情報を三浦按針が知らずに尖閣海域を航行することはほとんど考へられない。按針は平戸イギリス商館と密接な協力關係にあった。上述の千六百十七年一月十四日の按針の通信では千六百十四年の航海を回顧し、明國は苛酷であると述べる。これは千六百十六年に家康の和平の意を明國に通告したことを前提として、それまでの苛酷を述べた言葉かも知れない。

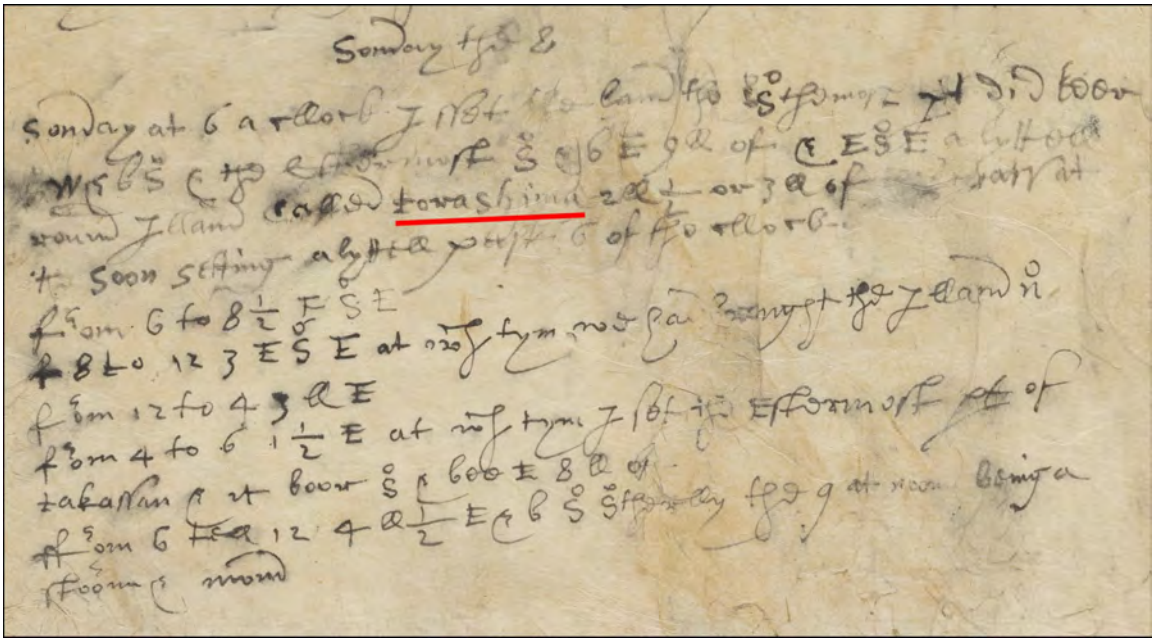
繼いで千六百十九年に三浦按針はベトナム北部にて交易し、復路の八月八日、臺灣附近で「Ｔｏｒａｓｈｉｍａ」（トレイシマか）を目撃する（圖版十一）。パーネルはこれもＴｏｒｉｓｈｉｍａと解するが（註二十二）、前後の文脈から島の現在地を特定することは難しい。

三浦按針の航海日誌は日本にもマイクロフィルムがもたらされてゐたが、不鮮明のため、今回オックスフォード大學で手稿全本を高精度撮影した。これにもとづき、Ｔｏｒａｓｈｉｍａの航路位置特定には今後なほ研究を要する。

いづれにしても、明國海防範圍の最前線列島とは對照的に、三浦按針が尖閣諸島周邊の航路を自由に航行できたことは確かである。また、全本の高精度撮影が本邦にもたらされたのは初めてであり、公開されれば三浦按針の歴史研究にも大いに資するであらう。

註二十二　Ｐｕｒｎｅｌｌ、１９１６、同註二十、ｐ．二百六十五。

圖版十一　オックスフォード藏、三浦按針航海日誌、Ｔｏｒａｓｈｉｍａ部分。下線は筆者。Oxford University, MS Savile48 folio66



〔參考研究〕

Christopher James Purnell,『The Log-Book of William Adams, 1614-19』、大正五（千九百十六）年複製本。原本收録誌は『Transactions and proceedings of the Japan Society』、Ｌｏｎｄｏｎ、大正四（千九百十五）年、ｖｏｌｕｍｅ１３、ｐａｒｔ．２。

川島元次郎『朱印船貿易史』、内外出版、大正十（千九百二十一）年刊。

岩生成一、「高砂時代日臺交通新史料――總督府博物館歴史部新着陳列品」、『科學の臺灣』創刊號、昭和八（千九百三十三）年十一月、頁十二-十三。

岩生成一「長崎代官村山等安の臺灣遠征と遣明使」、『臺北帝國大學文政學部史學科研究年報』第一輯、昭和九（千九百三十四）年、ｐｐ．二百八十五-三百五十九。

村上直次郎譯註『增訂異國日記抄』、雄松堂書店、昭和四十一（千九百六十六）年改訂復刻版。

リチャード・コックス『イギリス商館長日記』譯文編之上。東京大學史料編纂所編、東京大學出版會、昭和五十四（千九百七十九）年刊。

岩生成一『新版朱印船貿易史の研究』、吉川弘文館、平成元（千九百八十九）年刊。

「英和対訳、三浦按針１１通の手紙」田中丸榮子、ジェフ・ニール、濱野みさえ。長崎新聞社、平成二十二（二千十）年。

鄭潔西「万暦４７年徳川将軍に外交文書を送った「浙直総兵」について」、『東アジア文化環流』第五號、平成二十二（二千十）年東方書店。

平岡隆二『南蛮系宇宙論の原典的研究』、花書院、平成二十五（二千十三）年。

「尖閣４００年前、明の支配域外、皇明実録に記載」、『讀賣新聞』平成二十五（二千十三）年一月二十一日夕刊第十二面。

いしゐのぞむ「尖閣釣魚列島雑説七篇」、頁五十一至六十八、長崎純心大學比較文化研究所『ことばと人間形成の比較文化研究』所收、平成二十五（二千十三）年刊。

Reinier H. Hesselink "The dream of Christian Nagasaki : world trade and the clash of cultures, 1560-1640", pp.167-171 ; "The Taiwan Expedition : Murayama To-an", McFarland c2016.

石井望「いま甦る尖閣大航海時代、三浦按針は尖閣を目撃した」、『八重山日報』連載、平成二十九（二千十八）年七月二十日至七月二十六日。

Ishiwi Nozomu "International Dispute Resolution by China on the Far Westside of the Senkaku Islands 400 Years Ago", American Society of Comparative Law, Works in Progress Conference, Room 206, Center for the Study of Dispute Resolution, University of Missouri, 令和元（二千十九）年十月十七日。